

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01001

研究課題名（和文）トルコ共和国建国期における権威主義体制の形成とその社会への浸透

研究課題名（英文）The formation of authoritarian regime and its influence on society in the founding period of the Republic of Turkey

研究代表者

小笠原 弘幸 (Ogasawara, Hiroyuki)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：40542626

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は、第一に、関連史料の翻訳（ナムク・ケマル著『オスマン史』序文、ズィヤ・ギョカルプ著『トルコ化・イスラム化・近代化』）である。第二に、権威主義体制の形成過程とその性格の分析（トルコ共和国の建国者ムスタファ・ケマルの伝記『ケマル・アタテュルク オスマン帝国の英雄、トルコ建国の父』、および共和国をめぐるシンポジウムにおける報告「オスマン帝国／トルコ共和国における共和主義 ケマリズムの位置づけと再評価をめぐって」）である。これらの成果によって、オスマン帝国末期からトルコ共和国初期に続く権威主義の潮流を、さまざまなアクターの思想や行動を分析することで、一定程度明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、トルコにおける権威主義の歴史的展開の一部を明らかにしえた。現在、トルコに限らず、さまざまな国で強権化や権威主義化の傾向がみられる。本研究は、トルコにおいてはそれが現在に限った事ではなく、トルコ共和国初期、あるいはオスマン帝国末期にまでさかのぼりうることを示した。これは、現代の権威主義を考えるさいの比較の視点を提供しうるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The results of this research are, firstly, the translation of relevant historical works (Namik Kemal's Preface to History of the Ottomans, Ziya Gokalp's Turkification, Islamisation and Modernisation), a biography of the founder of the Turkish Republic, Mustafa Kemal (Ataturk), and a presentation at a symposium on the Republic. With these results, the authoritarian currents that continued from the end of the Ottoman Empire to the early years of the Turkish Republic could be clarified to a certain extent by analysing the ideas and actions of various actors.

研究分野：オスマン帝国史、トルコ共和国史

キーワード：オスマン帝国 トルコ共和国 権威主義 ケマル・アタテュルク 共和制

1. 研究開始当初の背景

中東・アラブ諸国の多くは、第二次世界大戦後、軍事クーデタを経て独裁・権威主義体制へと進んだ。2011年には、いわゆる「アラブの春」が起き、民主化が進展するかと期待されたが、最終的には多くの国で失敗に終わり、独裁と権威主義はより強固になった。中東で数少ない民主主義の「優等生」と見なされているトルコにおいても、近年、大統領権限の拡大や反対派の排除によって、強権化が進行する事態となっている。こうした中東における権威主義の進展(あるいはその裏返しとしての「民主化の失敗」)は、近年、地域研究や政治学の分野において注目を集めている研究課題であり、これはトルコでも例外ではない。たとえば現政権下の権威主義については、近年、バシエルによって論集『トルコにおける権威的政治 選挙、抵抗、公正発展党』(2017年)が編まれている(注1)。しかし、トルコ政治における権威主義は、近年はじめて起こったものではない。オスマン帝国末期には、政権による議会の閉鎖や反対派の排除が行われた。トルコ共和国では、その建国(1923年)直後より国父アタテュルクがライバルを追放し、1945年まで続く一党独裁体制を築いた。それ以降も、度重なるクーデタ(1960年、1971年、1980年、1997年)によって民主的に選出された政権が転覆、そのたびに軍の意向をくんだ強権的な政権がつけられた。これらに鑑みると、権威主義的性格は、近現代のトルコの歴史に通底する政治文化ともいえる。

こうした事情にもかかわらず、トルコ共和国建国の前後にまでさかのぼって、トルコ政治の権威主義体制を検討しようという研究は、決して多くはない。トルコの権威主義を扱った歴史研究が不調なのは、二つの理由が考えられる。第一に、共和国初期についての研究が、もっぱらナショナリズムと世俗主義を主要な問題関心としてきたことである。トルコ共和国は、中東・イスラム諸国では数少ない、イスラムを排除し民族主義を国是として成立した世俗国家であるから、ここにまず関心が集中するのは妥当ではある。第二に、イデオロギー的な理由が挙げられる。トルコ共和国では建国の父アタテュルクに対する批判が禁じられており、欧米の研究者も、世俗主義の担い手たるアタテュルクを英雄視する傾向が強く、その客観的な評価が妨げられてきたのである。

2. 研究の目的

以上の潮流を踏まえると、トルコにおける権威主義の台頭を長期的な視座から理解するためには、イデオロギー的な制約に囚われず、共和国建国前後にまで遡って、権威主義がトルコの政治と社会に根付いてきた背景を探る必要があると考えられる。

本研究は、トルコ共和国が建国された1923年から一党体制が崩れる1945年を下限として(ただし、本研究はオスマン帝国末期からの政治的・社会的連続性も重視する)、主要な政治アクターの権威主義的言説を分析し、それが実際の政策においてどのように社会に適用されたかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

共和国初期において権威主義体制が構築された思想的背景を探るために、建国の父にして初代大統領であるアタテュルクを始めとした、権力の中核にいた人々の行動や言説を分析する。その一方で、亡命した知識人ハリデなどアタテュルク体制に対する批判者となった者や、オスマン帝国末期の思想家でアタテュルクに影響を与えたといわれるギョカルプらも取り上げ、この時代における権威主義的思想の形成過程とその性格を浮き彫りにする。主要な史料としては、彼らの著作物、定期刊行物の記事、議会の議事録が挙げられる。また、外国人による記録や報告書も積極的に利用する。

4. 研究成果

本研究の成果は、大きく分けて二つである。

(1) 関係史料の翻訳

オスマン帝国末期の思想潮流を検討するため、タンズィマート期の愛国知識人ナームク・ケマルによる『オスマン史』の序文、そしてトルコ主義のイデオログとして活躍したズィヤ・ギョカルプの著『トルコ化・イスラム化・近代化』の翻訳を進めた。後者については、ギョカルプに造詣の深い伊藤寛准教授(帝京大学)に監訳者として加わっていただき、協力を得た。また、どちらの翻訳においても、九州大学大学院人文科学府の大学院生たちとともに講読をすすめたため、彼らも共訳者となっている。『トルコ化・イスラム化・現代化』の翻訳は、(上)および(中)を刊行したが、残念ながら、(下)の準備がおくれ、完結は成らなかった。しかし、(下)は、2024年度中に刊行する予定である。

『オスマン史』は、オスマン帝国における近代的・愛国的歴史叙述の嚆矢となった著作であり、

軍事学校の教科書として用いられることも意図されていた（著者の死去により、未完に終わった）。本作品は、史料間の比較のような、史料批判的な手法が随所に見られ、その意味では学問的な歴史学の影響を受けている。しかしその一方で、オスマン帝国にとって都合の悪い事実は、我田引水のような理屈を持って否定するなど、過度に愛国的な姿勢がみられる。また、西洋の東洋学者が表明するオスマン帝国やムスリムへの偏見にたいし、苛烈な批判を繰り返してもいる。これは、西洋列強の圧力にさらされた当時、ムスリム・トルコ人としてのプライドを確保しようとしたゆえのことであろう。こうした姿勢は、トルコ共和国初期の知識人たちにも受け継がれてゆくことになる。アタテュルクは、若かりし頃にナムク・ケマルの作品を愛読していた（『オスマン史』を読んでいたかどうかは不明だが）ため、間接的な影響も想定しうる。

『トルコ化・イスラム化・近代化』は、オスマン帝国末期に雑誌に連載された記事をまとめたものであり（一部書下ろしも含む）、ズィヤ・ギョカルプの主著のひとつと見なされる。彼の主たる問題関心は、タイトルにもある通り、「トルコ民族主義と、イスラムの信仰と、近代化は同時に成立しうるのか」というものである。ギョカルプにとって、これら三つは、排他的なものではなかった。トルコ民族主義を大前提としつつも、イスラムをその欠かせない要素とし、近代化もなしとげようと論じたのである。またギョカルプは、形式的に近代化を押し付けるのではなく、内的な必然性から改革を受け入れるような方法論も提示した。言い換えれば、権威的な手法に拠らない国民国家の形成を論じたといえよう。ギョカルプは、トルコ共和国初期のイデオログだったとされるが、共和国成立後はやくに死去したため、彼の思想がどこまで影響を与えたかについて、まとまった研究はない。アタテュルクは、ギョカルプの思想について、みずからの国家観に適したものだけをピックアップしたと考えられるが、その具体的な関係は今後の検討課題である。

（２）アタテュルクの権力確立と権威主義

本テーマの業績である単著『ケマル・アタテュルク』においては、これまで本邦においては学問的な伝記が著されていなかった、建国の父アタテュルクの事績を詳細に著した。トルコ共和国の体制を考えるさいに、ケマルの思想や行為が与えた影響は甚大であり、それを抜きにして考察することはできない。そのさい、アタテュルクのみならず、彼の同胞たち（ファト、カラベキル、フェトヒ、レフェト、イスメト、ハリデなど）の言動を追うことで、アタテュルクがいかに自らの権力を確立していったかに注目した。アタテュルクは、もともと、オスマン帝国の枠内での栄達を考えていた。しかし、監察官として東方へと赴任した後は、同胞たちの協力のもと、国民闘争をまとめあげることに尽力した。しかし、だれが執行部のリーダーとなるかで争いが生じた。また、共産主義者や第二グループなど、ライバルとなる集団に対しても圧力を加えた。共和国成立後は、カラベキルら建国の元勳らを阻害し、イスメトを代表とする側近たちを重用し、最終的にはカラベキルらは政権から排除された。権力を固め、共和人民党の一角独裁を確立した後、ケマルは国民闘争の歴史から元勳たちを排除し、みずからの業績を強調した。ケマルの政策は、ハリデをはじめ建国の元勳たちに批判されたが、こうした批判は、トルコ国内では封殺された。

九州史学会シンポジウムで報告した「オスマン帝国／トルコ共和国における共和主義 ケマリズムの位置づけと再評価をめぐって」においては、以上の歴史的状況をふまえ、トルコ共和国における共和制の性格を論じた。ケマルは、最終的にはトルコに複数政党制を導入しようと構想していたとされる。しかし、1930年の野党設立の試みは、与党の反対にあって頓挫し、一角独裁に回帰した。トゥンチャイの研究に代表されるように（注２）、ケマルによる野党設立の試みとその取りやめは、その後の軍事クーデタと類似しているとみなされる。軍部が「民主主義の後見人」であるという主張は、かつては肯定的な位置づけであったが、現在は否定的に言及されるのが定説である。こうした状況について、最新の研究においては、また見直しが提唱されている。アイテュルクらの指摘を要約すると、ケマルによる複数政党制導入の試みは、トルコに最終的に複数政党制導入をもたらした（1945年）という観点から、先駆的な試みとして再評価すべきというのである（注３）。このような指摘は、親イスラム政党が勢力を確立して久しい現在のトルコ共和国の情勢の中で、リベラルな研究者たちによる新たな試みとして取らえることもできよう。ただし、管見の限り、野党設立の再評価の試みは、まだ提言に留まり、実証的かつ本格的な検討はなされていない。ケマルが作り上げたと思なされている権威体制の評価が、どのように捉えなおされるかは、今後の課題であるといえよう。

（注１）Başer, Bahar. *Authoritarian Politics in Turkey: Elections, Resistance and the AKP*. London: I.B.Tauris, 2017.

（注２）Tunçay, Mete. *Türkiye Cumhuriyeti'nde Tek-Parti Yönetimi'nin Kurulması (1923-1931)*. İstanbul: Yurt Yayınları, 1981.

（注３）Aytürk, İlker and Berk Esen eds. *Post-Post-Kemalizm: Türkiye Çalışmalarında Yeni Arayışlar*. İstanbul: İletişim Yayınları, 2022.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 小笠原弘幸、伊藤寛了（監訳）	4. 巻 160
2. 論文標題 ズィヤ・ギョカルプ著『トルコ化、イスラム化、近代化』翻訳（中）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史淵	6. 最初と最後の頁 93-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/6781032	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小笠原弘幸、伊藤寛了（監訳）	4. 巻 159
2. 論文標題 ズィヤ・ギョカルプ著『トルコ化、イスラム化、近代化』翻訳（上）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史淵	6. 最初と最後の頁 119-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4772808	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小笠原弘幸	4. 巻 158
2. 論文標題 ナムク・ケマル著『オスマン史』序文	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史淵	6. 最初と最後の頁 107-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4372121	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小笠原弘幸
2. 発表標題 オスマン帝国/トルコ共和国における共和主義：ケマリズムの位置づけと再評価をめぐって
3. 学会等名 九州史学会（招待講演）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小笠原弘幸	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 303
3. 書名 ケマル・アタテュルク	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------